

新型コロナ「国家を超えた連帯の好機」

写真は朝日新聞 4月8日「オピニオン」。社会学者の大澤真幸さんインタビューから、示唆に富む発言を抜粋して紹介したい。

ウイルス自体は文明の外からやってきた脅威ですが、それがここまで広がったのは、「グローバル資本主義」という社会システムが抱える負の側面、リスクが顕在化したからだと考えています。

新型コロナウイルスの深刻な特徴は、感染の広がるペースがあまりにも速いことです。2002~03年に中国南部から広がった重症急性呼吸器症候群(SARS)とはまるで違う。病原体自体の性質の違いもありますが、中国がグローバル資本主義を牽引し、国内外への人の移動が飛躍的に増えたことが確実に影響しています。

人類の力が自然に対して強すぎるため、気候変動で大災害が頻発する。それにより私たちはかえって、自然への自分たちの無力を思い知らされる逆説が生じている。今回のパンデミックも、私たちが自然の隅々まで開発の手を広げたことで、未知の病原体という「自然」から手ひどい逆襲を受けている。両者は同種の問題です。

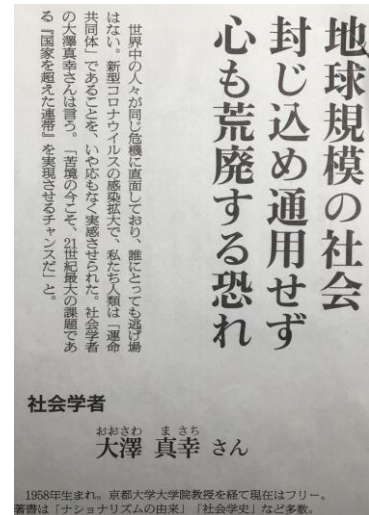
社会や経済のシステムが国レベルで完結していた時代であれば、「封じ込め」は抜本的対策になりえた。だけど、現代の日本で感染拡大を抑えられても、世界中に感染が広がっている限り、封鎖による経済的打撃から逃れる方法はなく、五輪も開催できない。一国レベルで感染問題が解決しても、その国が幸せになるわけではない。「〇〇ファースト」は、ウイルスの脅威には通用しません。

標題の「国家を超えた連帯の好機」について

第1に、気候変動は非常に長いスパンで影響が表れるため、対応も進みにくかったが、ウイルスはあっという間に世界中に広がり、一人ひとりの命を直接脅かしています。

第2に、政治的・経済的に恵まれた人々は、格差や貧困、海水面の上昇など従来の社会問題から逃れたが、新型コロナウイルスには多くの著名人や政治家も感染しています。「民主的で平等な危機」であり、社会の指導層・支配層もわがこととせざるを得ない。その分、思い切った対策が進む可能性がある。

第3に、今回のパンデミックが終息したとしても、新たな未知の感染症が発生し、広がるリスクは常にある。日常生活の背後に「人類レベルの危機」がいつ忍び寄るか分からないことを、私たちは知ってしまった。それが私たち自身の政治的選択や行動に大きな影響を与えるかもしれません。



(2020年4月12日)